

(鹿屋市大浦町中ノ原)

位置と環境

標高70mのシラス台地南西端にあり、中ノ丸遺跡と向かい合う台地に位置している。

調査の経緯

一般国道220号鹿屋バイパス建設工事に伴って、昭和60(1985)～昭和63(1988)年に県教育委員会が発掘調査を実施した。

遺構と遺物

縄文時代・弥生時代・中世～近世の複合遺跡である。

縄文時代は、早期・前期・後期・晩期のものが発見された。

早期では石坂式土器が出土している。

前期の遺構は、土器とともに2基の集石遺構が検出された。遺構は直径65cmの円形のもの、70×55cmの楕円形のものであった。いずれも明瞭なくぼみはない。土器は轟式系と曾畑式系が出土した。

後期は多種の遺物が出土した。土器は指宿式・市来式・丸尾式・納曾式・西平式などがある。特に、丸尾式土器と納曾式土器さらに西平式土器の古段階の土器はまとまって出土しており、編年を考える上で注目される土器群である。

石器には石鏃・石匙・削器・打製石斧・磨製石斧・磨石・敲石・凹石・石皿などがある。磨製石斧には小型の扁平石斧、乳房状のもの、ノミ状のもの、太型はまぐり刃のものなど21点出土した。磨石・敲石・凹石などは70点出土しているが、これらは三種の要素が複合して使用されており、特に磨石と敲石は兼用されている場合が多くみられた。円盤形土製

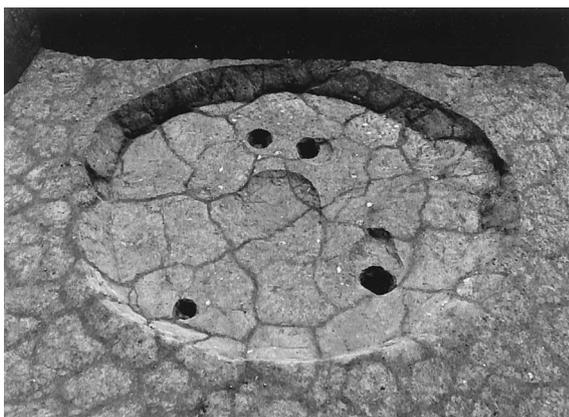
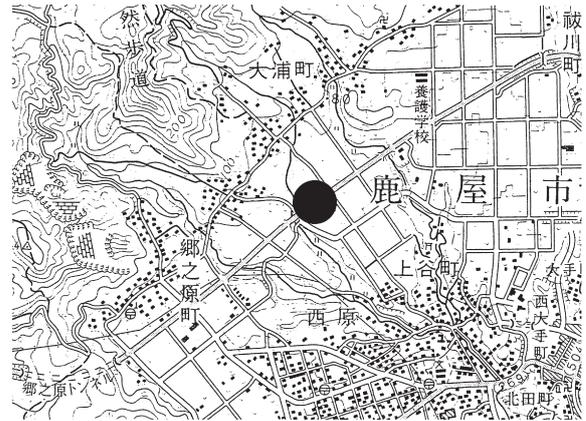


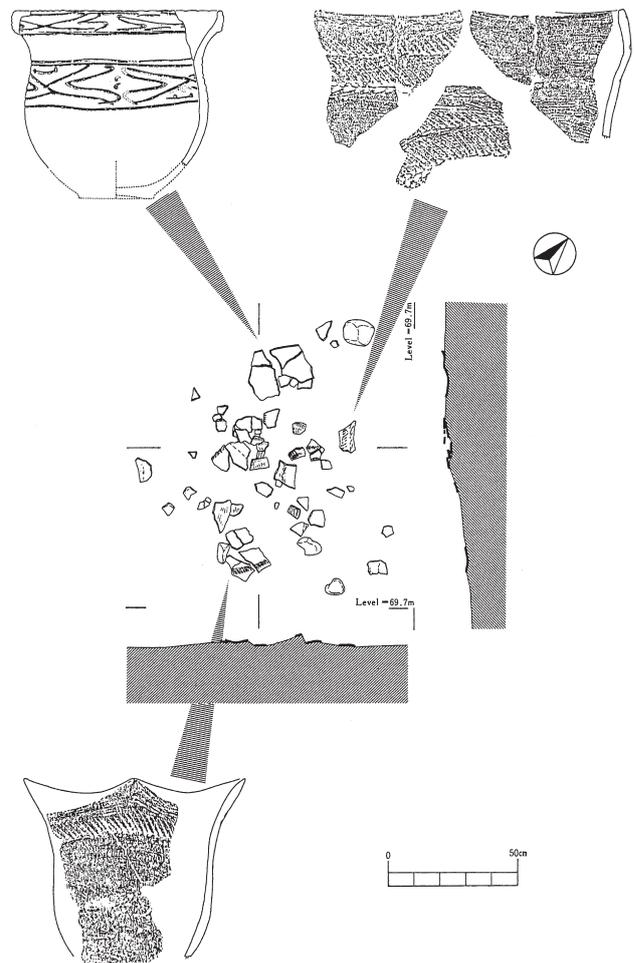
写真1 縄文時代晩期の竪穴住居跡



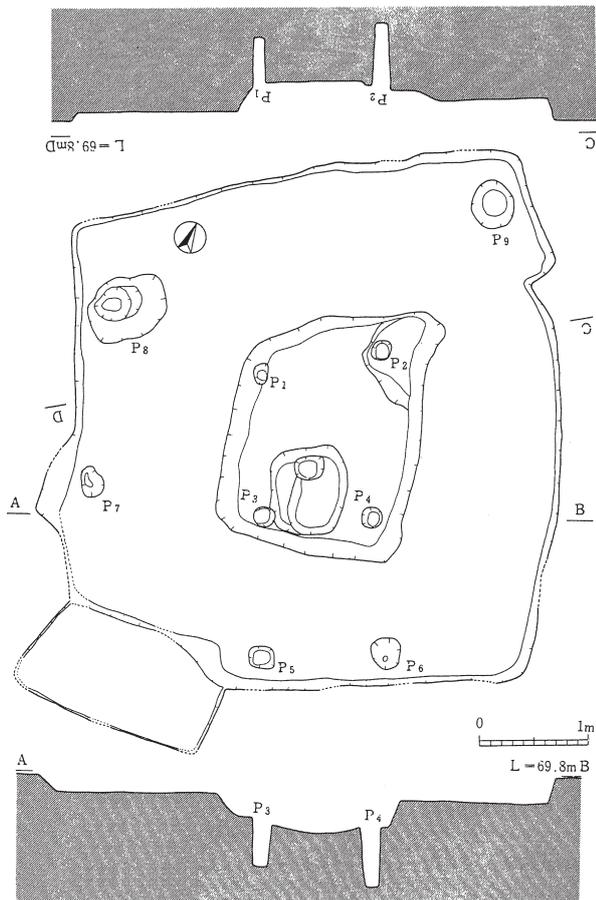
第1図 中ノ原遺跡の位置

加工品が19点出土し、穿孔を有するもの、周辺を丁寧に研磨したものがみられた。

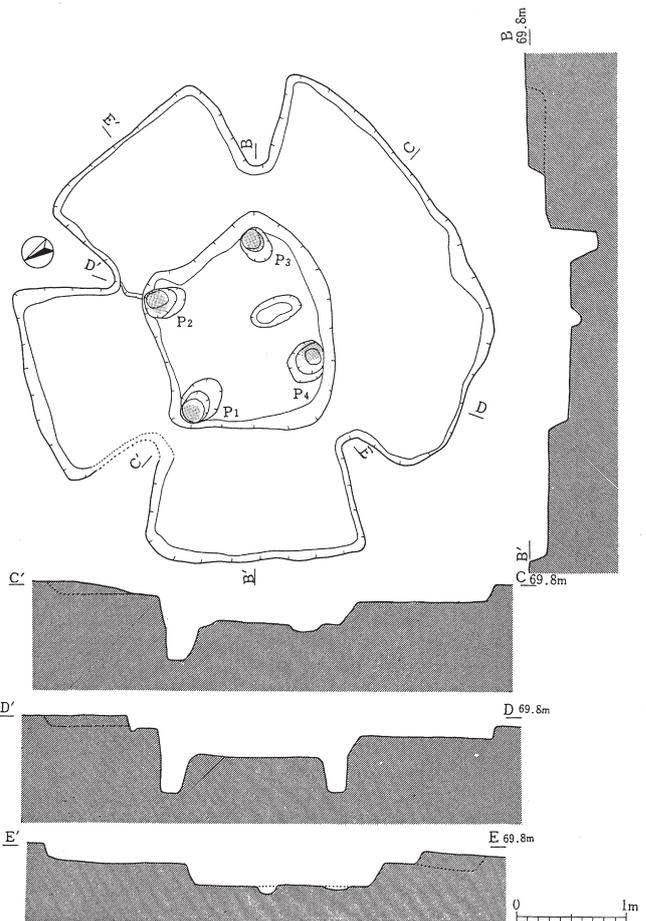
晩期の遺構としては、竪穴住居跡・土坑・集石遺構がそれぞれ1基ずつ検出された。竪穴住居跡は3.5m×3.2mの略円形で、中央に炉跡と考えられる焼土を含んだ浅い円形土坑が見られた。柱穴状の小ピットが数個検出されているが、柱の配置等は明らか



第2図 縄文土器の出土状況



第3図 1号竪穴住居跡



第4図 3号竪穴住居跡

かでない。

晩期の土器は入佐式土器が中心で、上記の遺構もほぼこの時期のものと考えられる。石器には打製石斧・磨石状石器など29点が出土した。

弥生時代では中期末から後期初頭の竪穴住居跡が3軒検出された。1号は5m×4.5mの方形で、東南隅に張り出し部を設けたプランのもので、中央の方形土坑の四隅に柱穴（4本）がみられた。炭化木が多く出土したことから、焼失家屋跡と考えられる。

3号は直径4.5mの円形を基調とするプランをもつものであるが、4か所の間仕切りを設け、いわゆる花卉状の形態をもつものである。1号と同様に中央に方形の土坑があり、四隅に柱穴（4本）を配した構造が見られた。

土器は甕形土器・壺形土器・鉢形土器などの器種が出土した。甕形土器の口縁部が「く」字状を呈する山ノ口式土器と呼ばれるものである。また、瀬戸内系の土器も若干みられた。

中世～近世の遺構は、古道（幅1.5m）・溝状遺構・掘立柱建物跡等が検出された。溝状遺構も小道としての機能が考えられる。

掘立柱建物跡は3棟確認された。1号は2間×4間のもの、2号と3号は2間×3間をベースとしたもので、3号には庇が設けられていた。この2棟は建物の軸方向こそ違いがあるが、同一場所で検出された。3号のP20からは、地鎮のためと考えられる土師器片が2点出土した。

特徴

- ・縄文時代後期の異系統土器（丸尾式・納曾式・西平式土器の古段階）がまとまって出土した。
- ・縄文時代晩期の遺構が検出され、入佐式土器期の様相を知る上で貴重な資料となった。
- ・弥生時代の集落研究に欠かせない資料が得られた。

資料の所在

出土遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターに保管されている。

参考文献

- 鹿児島県教育委員会1989「中ノ原遺跡（I）」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』（48）
- 鹿児島県教育委員会1990「中ノ原遺跡（II）・中原山野遺跡・西原掩体壕跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』（52）（前迫亮一）